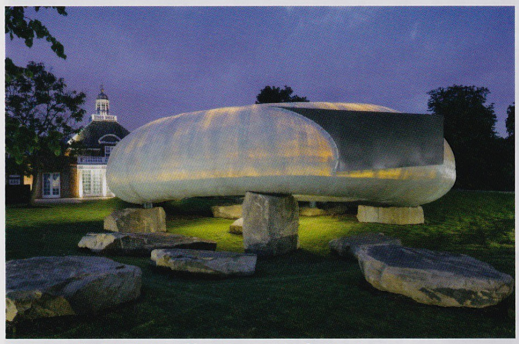
22 September 2014 Number 66

PAPER CDG

平山景子さん連載　DOVER STREET MARKET LONDON10周年　NICOLAS BUFFE イベント　TM WALTER
FASHION NIGHT OUT　DSM NY FASHION WEEK　SHOPオープン告知　NOIR KEI NINOMIYA インタビュー

ファイバーグラス製のパビリオン

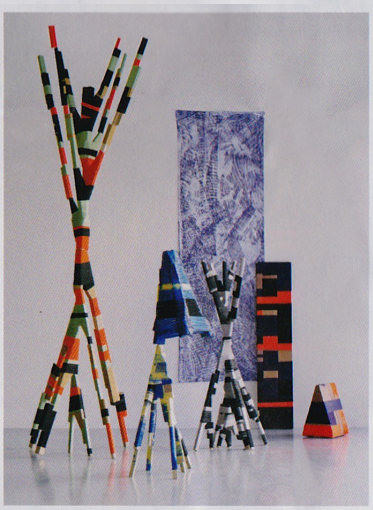


Serpentine Gallery Pavilion, 2014 designed by Smiljan Radic
Photograph ©2014 Iwan Baan

毎年ロンドンの夏の名物となっている、サーペンタイン・ギャラリーのサマーパビリオン。1965年生まれ、南米チリ出身のスミリャン・ラディッチが選ばれた。2009年にはアメリカ建築学会から名誉会員の称号を受ける。
ラディッチのアイデアはプラットフォームの部分に荒々しい形の玄武岩を配置し、その上にドーナツ状の建物がのっているというもの。パピエマルシェの手法で成形されており、厚さ12ミリという素材はファイバーグラス製建物としてはかなり薄い。夜はなかからの照明で、半透明の光がやさしく浮かび上がってくる。

糸の遊び

アントン・アルヴァレスの作品は「Thread Wrapping (糸のラッピング)」という題がついている。彼自身が考案した機械を使って制作された家具やオブジェ。材料は芯材、糸、糊のみ。芯になる部分は木材、金属、プラスティックなどなんでもいい。カラフルな糸と木工用ボンドが取り付けられた大きな車輪が二つ重なった機械に電源を入れると、二つの車輪が高速回転し、輪の中に芯材を入れると糊が少しずつ絡めとられ、作品が出来上がっていく。大胆な色使いとユーモラスな形の作品がつくられる現場は、最近よく見かけるようになった制作をパフォーマンスとして見せるタイプでもある。デザイナー自作の機械で作品ができていく様は、屋台の綿アメ作りにも似て楽しい。アントン・アルヴァレスはスウェーデンとチリの血を引くプロダクトデザイナーである。



All images by Gustav Almestal,
Courtesy Gallery Libby Sellers

没後30年 フランソワ・トリュフォー映画祭

『大人は判ってくれない』『突然炎のごとく』『隣のおんな』・・・若い世代の人たちが、どれくらいフランソワ・トリュフォーを知っているだろうか。名前と映画の題名は知っているけれど、映画は観たことがないという人も多いのでは。
トリュフォーは、1932年パリ生まれ。50年代後半、ジャン=リュック・ゴダールらとともにヌーヴェルヴァーグの一人として、世界の映画界に革命を起こした。不幸な少年時代を送り、映画に出会って、映画に生きる道を見出したトリュフォーの作品には、自分自身の人生や思想、恋愛観が色濃く投影されている。そこが人々の共感を得るところで、彼が映画とともに生きていることを実感させてくれる。1984年52歳で亡くなった。没後30年を記念して、デビュー作から遺作まで23作品が公開される。
(角川シネマ有楽町　10/11-10/31　3週間限定開催　配給マーメイドフィルム)

ジェフ・クーンズ回顧展

Jeff Koons,Metallic Venus,2010-12.
Mirror-polished stainless with transparent color coating and live flowering plants; 100×52×40 in.(254×132.1×101.6cm).
Private collection; courtesy Fundacion Alminey Bernard Ruiz-Picasso para el Arte. ©Jeff Koons

ジェフ・クーンズは、現在最も成功し、影響力のあるアーティストのひとりとして位置づけられている。今回の回顧展では、既製品への新たなアプローチ、アートと大衆文化の境界線の分析、工業製造の限界への挑戦、アーティストのセレブ信仰と世界市場との関係、などについてパイオニア的な存在であるクーンズの作品を再検証する内容。ニューヨークのホイットニー美術館には、1978年から現在までのおよそ150点が集結している。
初期は抽象彫刻を発表していたジェフ・クーンズ。その後ステンレス鋼製の彫刻、マイケル・ジャクソンとペットのバブルス君のキッチュな作品などで一躍有名になる。近作は、古代ギリシアやローマの彫刻をモチーフにした「Anthiquity」シリーズで、CTスキャンとデジタルイメージを駆使して石やステンレス鋼に古代彫刻を再現。クラシックな彫刻を新鮮なアート作品へと進化させた。ジェフ・クーンズの新しいアートへの探求は衰えていない。
(ホイットニー美術館 ～10/19)

三次元を操るザハ・ハディット展

Photo:Christian Richters
@Zaha Hadid Arhitects

2020年東京オリンピックの会場となる新国立競技場の建築家として、一躍注目を集めているザハ・ハディッド。
バグダッド生まれ。ロンドンの建築学校AAで学んだ後、レム・コールハウスの事務所OMAに参加、1980年に自分の事務所を設立した。しかしその後10年間、彼女の建築のアイデアは、前衛的過ぎて実際に建てられることはなく、「アンビルト(建築されない)の女王」といわれていた。ザハの特徴は、スケールの大きさ、動きに対する独特な視点と感覚。その近未来的な建築は圧倒的な印象を与える。展覧会では「アンビルト」時代の膨大なリサーチに基づいて描かれたドローイングから、世界各地での実作の設計、インテリア、靴などのプロダクトデザインなどが、ダイナミックなインスタレーションで展示される。東京オリンピックの新国立競技場についても、コンクール応募から最新の計画までが紹介される。
(東京オペラシティ　アートギャラリー 10/18-12/23)
写真: ヴィトラ社消防署 ヴァイル・アム・ライン
1991-93竣工